

相互独立的—相互協調的的自己観尺度 （改訂版）の作成

高田利武*・大本美千恵**・清家美紀**

Construction of a revised scale
for independent and interdependent construal of self

Toshitake TAKATA, Michie OMOTO and Miki SEIKE

要 旨

相互独立的—相互協調的的自己観（Markus & Kitayama, 1991）の測定尺度（高田, 1992）を複数の被験者群に実施した結果に基づき、相互独立性は「独断性」「個の認識・主張」、相互協調性は「評価懸念」「他者への親和・順応」の下位領域から構成される、全20項目から成る改訂尺度を作成した。さらに、本尺度の信頼性と構成概念妥当性を検討し、その両者ともほぼ満足し得ることを確認した。併せて、相互独立的—相互協調的的自己観の個人差測定に伴う比較文化的視点と文化内比較の相同性の問題を論じた。

問 題

従来、わが国の実験社会心理学研究が専らアメリカ社会心理学の枠組みに沿って行なわれ、日本文化における社会的現実を反映していない、という批判がしばしばなされてきた（例えば、田中, 1979）。しかしながら、そのような批判の多くは、彼我の相違を統一的に捉えようとする視点や方法論を欠いた単なる批評の域に止まりがちであり、それ以上の成果を上げることが出来ない状況が久しく続いた。然るに近年、文化と心理的過程との動態的相互関係を研究対象とする文化心理学の勃興とともに、従来のアメリカ社会心理学における実証的知見や構成概念の普遍妥当性への信仰が反省され、日本文化に特徴的とされる諸現象もそのような視点から捉え直されようとしている。

北山（1995；Markus & Kitayama, 1994）が提唱する文化的自己観の概念は、斯かる潮流の中に位置づけられよう。文化的自己観とは”ある文化において歴史的に共有されている自己についての前提（北山, 1995）”であり、Markus & Kitayama（1991）のいう相互独立的自己観（independent construal of self）と相互協調的的自己観（interdependent construal of self）の分類¹⁾は、そのような文化的自己観に立脚する分析的モデルである。前者は“個人は

他者から分離しており、他者から独立して独自性を主張することが必要”とする自己観であって、西欧とりわけ北アメリカ中産階級に典型的である一方、後者は“個人は互いに結びついていて個別的ではなく、さまざまな人間関係の一部になりきることが大切だ”とする考えで、日本を含むアジアの文化で前提とされるものである。

この2つの自己観ないし人間観の基本的相違は、自分と他者・社会との関係をどう捉えるかという自己の定義だけでなく、自己の構造、個人の特性の意味、社会の中で個人に課される課題、自己にとっての他者の役割、自尊心の基盤、等の広い範囲に及ぶ。このような分析視点は極めて説得的であり、日本文化における認知、感情、動機づけなどの心理過程への影響と、欧米におけるそれとの相違に関する実証的知見が集積されつつある（北山，1995；北山・高木・松本，印刷中）。一方、Markus & Kitayama (1991) は、西欧・アジアそれぞれの文化の中でも、非典型的な自己観が優位な下位文化や個人が存在することを示唆している。したがって、相互独立－相互協調的自己観の区分は比較文化的視点に立った分析モデルであるのみならず、諸心理過程の文化内比較に対しても有効なモデルとなり得る。

文化内比較の分析モデルとして相互独立－相互協調的自己観の分類を援用する場合、以下のような論理がその前提となろう。すなわち、相互独立的自己観と相互協調的自己観は人間存在の基本的様式である個性的存在と社会的存在（梶田，1988）に即したものであり、いかなる個人もその両者の自己観ないし自己スキーマを持ち得るが、両者の相対的な優勢さによって諸心理過程への影響の差が生じる（高田，1992；高田・松本，1995；木内，1995）。すなわち、2つの自己観の併存とその動態的關係（Markus & Warf，1987）を仮定することによって、比較文化的視点と文化内比較は同一の枠組みを共有することとなる。このような視点に立脚して、2つの自己観の相対的優勢度を個人間差異として捉え、これを尺度化しようとする試みが本邦において最近いくつかなされ、それに基づいた知見が集積されつつある。

黒川（1994）は、Markus & Kitayama（1991）による測定尺度を改訂した、相互独立性・相互協調性各6項目、計12項目より成る広大式自己解釈図式尺度を開発している。この尺度を通じて、(1)相互独立性が優勢な者は認知の場独立性が強いが、相互協調性は場依存－場独立性と関連しない（黒川・坂田，1993）、(2)相互協調性が優勢な者は優勢でない者より、理想的自己像に関して正（そうありたいと思っている姿）、負（そうありたくないと思っている姿）とも高い理想を持っている（黒川・坂田，1994）、(3)相互独立性が優勢な者は自尊感情が高い（黒川，1994）、等の知見が得られている。

黒川（1994）はまた、上記尺度に Markus & Kitayama（1991）および以下に述べる高田（1992）の尺度項目を付加した、相互独立性・相互協調性各8項目、16項目からなる状況依存的自己解釈図式尺度をも作成しており、2つの自己観はそれぞれ2つの因子（「独断性」「自己信頼」および「他者への順応性」「評価懸念」）から構成されているとしている。それを通じて、(1)相互協調性は内集団に属する他者に対して高まるが、相互独立性は周囲の他者による影響を受けないこと（松田・黒川，1994）、(2)相互協調性が強い者も相互独立性が強い者も、外集団に属する他者との葛藤解決行動の満足度よりも、内集団に属する他者との葛藤解決行動の満足度が大きいこと（黒川，1994）、等が見出されている。

一方、高田（1992）は、相互独立性・相互協調性各20項目、計40項目から構成される尺度を作成している。この尺度では、相互独立性と相互協調性の双方とも、因子分析に基づいて4つの下位領域に分類されている。すなわち、相互独立性に含まれるのは「独断性」「個性の認識・主張」「利己主義」「自立性」、相互協調性を構成するのは「他者・状況への順応」「評価懸念」「集団への依存」「情緒的結合」の各因子である。この尺度を用いて、相互協調性が優勢

な者は、(1)対人関係あるいは外見に係わる現実と理想の自己評価の差が自尊感情に及ぼす影響が大きい（高田，1992）、(2)自己評価の手段として社会的比較を多用する（高田，1993）、(3)自己の否定的な面を認識する際には却って他者を手がかりとしない（高田，1995a）、(4)自己概念の不安定さを媒介とした自己認識欲求が強い（上瀬・堀野，1995）、等の事実が明らかにされている。

さらに高田（1994）は、相互独立性・相互協調性各10項目、計20項目から成る児童・生徒用尺度を作成し、(1)相互協調性は児童期から青年期にかけて増大する（高田1994；高田1995b）、(2)両親・友人・教師等の周囲の他者の言動と自己観との間に関連があり、とりわけ青年期以降にそれが認められる（高田，1994）、(3)相互協調性が優勢な児童・生徒は、自己の特性として肯定的側面より否定的側面を上げる傾向が強い（高田，1995b）、等の知見を得ている。

他方、木内（1995）は、相互独立的自己観に基づく行動と相互協調的自己観に基づく行動のいずれかを強制選択せしめる形式の16項目から成る尺度を作り、女性は男性より相互協調的自己観が優勢であることを、大学生と社会人を調査対象として示している。

このように、相互独立的—相互協調的自己観の測定尺度の作成を通じて、2つの自己観と諸心理過程の文化内比較を中心とした一定程度の成果が上がりつつあるが、これらの尺度にはなお問題も残されているように思われる。高田（1992）の尺度について言えば、その不安定性がある。同一の尺度を大学生に対して実施したにも拘わらず、当初の結果（高田，1992）では全40項目が項目分析を通過し、因子分析では上記した8因子が得られたのに対し、追試（高田，1995a）では2項目が項目分析の結果により不適切とされ、因子分析の結果も若干異なったものであった。これらの事実は、高田（1992）の尺度を構成している測定項目や、相互独立的—相互協調的自己観を構成する下位領域には、なお疑問の余地があることを示している。

また、黒川（1994）に報告されている広大式尺度もしばしば項目の加除を繰り返し、さらに測定項目を追加した状況依存的自己解釈図式尺度も作成されていることから、尺度を構成する12項目が果して必要にして充分なものであるかという点で、検討の余地が残されているように思われる。さらに木内（1995）による強制選択尺度も、相互独立的自己観と相互協調的自己観の相対的優位性を一次的に測定している点が問題と言える。確かに、一方の自己観が優勢であれば他方は微弱である傾向が一般的ではあるが、双方とも高得点あるいは低得点を示す者が存在すること（高田，1992）、相互協調的自己観の次元で現われる心理過程の相違は必ずしも相互独立的自己観の次元で現われる相違と並行してはいないこと（高田，1992；黒川，1994）等から、この2つの自己観はそれぞれ独立した次元に属する可能性が示唆されるからである。

本研究の目的は、高田（1992）の尺度を複数の対象者群に対して実施し、従来得た結果と併せて吟味することを通じて、相互独立的自己観および相互協調的自己観の個人差を測定する信頼に足る尺度を再作成するとともに、それぞれの自己観を構成する下位領域を検討し、併せて作成された尺度の信頼性と妥当性を確認することにある。研究Ⅰにおいては高田（1992）の原尺度の改訂を行ない、研究Ⅱでは新尺度の信頼性・妥当性を検討する。

研究Ⅰ

方法

調査対象者：以下の4群を対象に高田（1992）の尺度を実施した。

1. 国立大学学生199名（男子98名・女子101名：平均年齢20.2歳）。
2. 私立大学学生162名（男子141名・女子21名：平均年齢19.1歳）。

3. 私立大学学生140名(男子116名・女子24名:平均年齢19.6歳)。

4. 私立大学学生227名(男子168名・女子59名:平均年齢18.8歳)。

このうち、1群は高田(1992;1993)における調査対象者、2群は高田(1995a)における調査対象者の一部である。

手続き:相互独立性・相互協調性各20項目、計40項目に対して、7段階の自己評定を求めた。これらの項目は、Markus & Kitayama(1991)の記述と、日本における相互協調的自己観の様態として彼らが引用する土居(1971)、浜口(1977)の記述に基づいて作成した。その概要については高田(1993)を参照されたい³⁾。

結果

項目分析:相互独立性・相互協調性各20項目毎に、項目全体の平均値によって調査対象者をそれぞれ上位群・下位群に分割し、各項目の平均値の群間t検定を行なうことによって項目分析を実施した。さらに、相互独立性と相互協調性それぞれの項目全体の平均値と各項目の相関係数を算出した。この2種の分析を各調査対象者群毎に行ない、4つの群のいずれかで1%水準の群間有意差が得られなかったもの、および0.1%水準の有意な相関が得られなかったもの合計10項目は、これを不適切項目として除去した⁴⁾。

因子分析:上記の手続きの結果残った30項目に対して、各対象者群毎に因子分析(主成分法、バリマックス回転)を行なった⁴⁾。固有値1.2以上かつ累積寄与率50%以上を基準にしたところ、各対象者群に共通して「独断性」「個の認識・主張」「評価懸念」「集団依存性」「情緒的結合」「状況依存性」の6因子解を得た。その概要を示したのが表1である。ここで、各対象者群に共通して当該因子に所属する項目はその意味が一義的である一方、対象者群によって異なった因子に含まれる項目は多義的であると考えられる。そこで、対象者群の過半数に共通して当該因子に含まれることのなかった7項目を多義的項目として除外した⁵⁾。

ついで、残った23項目について因子分析(6因子抽出指定)を各対象者群毎に行なったところ、「独断性」「個の認識・主張」「評価懸念」「集団依存性」の4因子に関しては、各群に共通して抽出され、各因子に含まれる項目もほぼ一定していた。しかし、集団依存性因子を構成する2項目(「単独行動では不安や恥ずかしさを感じるので、集団行動のほうが好きだ」「個人では控えめで遠慮がちだが、集団になると案外積極的になれる」)は、日本的自己の構造を分析した高田・松本(1995)の知見において、普遍性をもつ相互協調的自己観とはやや異質で日本文化に特殊的な「身近な他者への配慮」因子を構成する項目と合致している。したがって、この2項目はMarkus & Kitayama(1991)による一般的概念の測定のためには不適切な要素を含むと言えるため、これを削除することとした。

一方、表1の状況依存性因子と情緒的結合因子に含まれる7項目に関しては、対象者群によって異なった項目の組み合わせによる因子が抽出された。したがって、これらの項目は意味的な連関が比較的強く、それを敢えて複数因子に区分することには若干の無理があると考えられる。また、この7項目には意味内容が比較的類似した項目が2つ含まれている。そこで、それらのうち「どのように振る舞うかは、誰といるか、どこであるか、あるいはその両者によって決まる」を除外した。

改訂尺度:かくして、上記3項目を除去した20項目について、因子分析を全調査対象者群を一括して行なった結果、表2に示す4因子解を得た。また、各対象者群毎に因子分析を実施した場合も、概ね同一の4因子解が得られた。このうち、第1因子の「評価懸念」、第2因子の「独断性」、第3因子の「個の認識・主張」は高田(1992)において得られた因子とほぼ同一

である。他方、第4因子は、状況や他者への依存、他者との対立の回避、他者との情緒的結合等を含むものであり、「他者への親和・順応」因子であると解される。この結果に基づき、相互独立性は「独断性（6項目）」と「個の認識・主張（4項目）」、相互協調性は「評価懸念

表1 因子分析（6因子解）の概要

	1 群	2 群	3 群	4 群
第1因子	<u>独断性</u> (5.41 23.5%)	<u>個の認識・主張</u> (5.15 23.4%)	<u>独断性</u> (5.67 25.8%)	評価懸念 (4.17 18.9%)
第2因子	評価懸念 (2.66 11.6%)	評価懸念 (2.84 12.9%)	評価懸念 (2.88 13.1%)	<u>個の認識・主張</u> (3.19 14.5%)
第3因子	情緒的結合 (1.68 7.3%)	<u>独断性</u> (1.77 8.1%)	<u>個の認識・主張</u> (1.94 8.8%)	<u>独断性</u> (1.71 7.8%)
第4因子	集団依存性 (1.47 6.4%)	集団依存性 (1.44 6.5%)	状況依存性 (1.44 6.5%)	情緒的結合 (1.46 6.6%)
第5因子	<u>個の認識・主張</u> (1.24 5.4%)	状況依存性 (1.28 5.8%)	情緒的結合 (1.18 5.3%)	状況依存性 (1.21 5.5%)
第6因子	状況依存性 (1.20 5.2%)	情緒的結合 (1.03 4.7%)	集団依存性 (1.05 4.8%)	集団依存性 (1.15 5.2%)

- ・（ ）内は固有値および寄与率。
- ・因子のうち、下線を付したものは相互独立的自己観、下線のないものは相互協調的自己観に属する。
- ・各対象者群に共通して当該因子に含まれる項目の概要例を以下に示す。
 - 独断性：他者が自分の考えを何と思おうと気にしない。
自分の信じる場所を守り通す。
 - 個の認識・主張：自分の意見はいつもはっきり言う。
いつも自信を持って発言し、行動している。
 - 評価懸念：他者の視線が気になる。
他者の評価を気にする。
 - 集団依存性：単独行動より集団行動のほうが好きだ。
個人では控え目だが、集団だと積極的になれる。
 - 情緒的結合：仲間の中で和を維持することは大切だと思う。
集団内の仲間との意見の対立を避ける。
 - 状況依存性：どう感じるかは他者や状況によって変わる。
どう振る舞うかは他者や状況で決まる。

(4項目)」と「他者への親和・順応(6項目)」の、各2つの下位領域から構成されるものと考え、さらに若干の語句の修正を行なった結果、これを20項目から成る改訂尺度とした(付録参照)。

表2 因子分析(4因子解)の結果

項目概要		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
評価懸念 (4.83) (24.2%)	他者の視線が気になる	.842			.209
	他者の評価を気にする	.830			
	他者との地位や相対関係が気になる	.751			
	迷いやためらいを感じ、実行に移せない	.614		-.313	
独断性 (2.63) (13.1%)	他者が自分の考えを何と思おうと気にしない		.737		
	自分の信じることを守り通す		.737	.225	
	自分で考えたのが最良の決断である		.631	.251	
	善悪は自分の考えで決まる		.562		
	自分一人で物事の決断をする		.539		
	考え・行動が他者と違っても気にならない	-.361	.480		
個の認識 ・主張 (1.50) (7.5%)	自分の意見はいつもはっきり言う		.210	.765	
	いつも自信を持って発言し、行動している		.235	.715	
	常に自分の意見を持つようにしている		.360	.626	
	常に自分が何をしたいのか分かっている			.541	
他者への 親和・順応 (1.23) (6.1%)	仲間の中で和を維持することは大切だ			-.316	.678
	集団内の仲間との意見の対立を避ける			-.265	.615
	意見が対立したとき相手の意見を受け入れる			-.290	.594
	人から好かれることは大切である	.323		-.369	.588
	相手や状況で態度や行動を変える	.369			.441
	どう感じるかは他者や状況によって変わる	.294			.404

・()内は固有値および寄与率。

・因子負荷量の絶対値が.2以下の場合は記載を省略。

研究 II

方法

調査対象者：研究 I における 4 群に加えて、以下の 4 つの群を対象とした。

5. 私立大学学生109名(男子89名・女子20名：平均年齢19.2歳)。
6. 私立大学学生72名(男子58名・女子14名：平均年齢19.2歳)。
7. 私立大学学生394名(男子296名・女子98名：平均年齢19.1歳)。
8. 私立大学学生62名(男子34名・女子28名：平均年齢19.4歳)。

このうち、5、6群は再調査被験者であり、それぞれ研究Iの2、3群の一部である。また、7群の一部は研究Iの4群の再調査被験者である。

手続き：再検査法による信頼性検討のため、研究Iの2、3、4群に対して、それぞれ4ヶ月、6ヶ月、9ヶ月の間隔において同一尺度を再度実施した。また、構成概念妥当性の検討および相互独立—相互協調性に関連する心理特性との関係を検討するべく、2群では集団主義尺度、6群では自己意識尺度、7群では日本的自己意識尺度、8群では自尊心尺度を自己観尺度と併せて実施した⁶⁾。

集団主義尺度は、Triandis (1989) の概念化に基づき、Semin, Goossens & Taris (1994) により開発された17項目の7段階評価リカート法尺度の邦訳 (Meijer, 1995) である。17項目は、伝統的集団主義6項目 (例：結婚するまでは、娘は両親の家で暮らすべきだ)、他者への依存性6項目 (例：重要な決定をするなら、自分の責任で行なうべきである：逆転項目)、親族の相互依存性5項目 (例：自分の親族の幸福には責任を感じている) の3つの下位領域に区分される。自己意識尺度は、Fenigstein, Scheier & Buss (1975) に基づいて作成された日本語版5段階評価30項目 (押見, 1992) であり、私的自己意識、公的自己意識、社会的不安の3下位領域から構成される。日本的自己意識尺度は、高田・松本 (1995) による7段階評価54項目であり、後述する7つの下位領域に分けられる。さらに、自尊心尺度は星野 (1970) 訳によるRosenberg (1965) 尺度で5段階評価10項目である。

結果

信頼性：研究Iで作成した改訂尺度に対して、対象とした4つの群を一括した資料を基に、信頼性の検討を行なった。まず、4つの下位領域を構成する尺度項目の信頼性を検討するために、各下位領域毎にCronbachの α 係数とSpearman-Brownの修正による信頼性係数を算出したところ、表3に示す結果を得た。「他者への親和・順応」の信頼性係数にやや問題が残されるが、概ねほぼ十分な値が得られており、本尺度の4つの下位領域の内的整合性は満足し得るものと言える。なお、4つの対象者群毎に同様の検討を行なった場合においても、一部の例外を除いて概ね同様の結果を得た (α 係数：.68～.85、信頼性係数：.64～.87)。

次に、再検査法により信頼性を検討するため、2群と5群、3群と6群、および4群と7群の間で各下位領域毎に相関を求めたところ、表4のようになった。各下位領域を通じて、4群の「他者への親和・順応」を除いて.60以上の相関係数が得られており、概ね満足すべき安定性が示されている。なお、総じて4群の再検査相関係数が低いのは、この群の再検査間隔が他より長いこと由来すると考えられる。これらの結果を総合すると、各下位領域の尺度はいずれも一定程度の内的一貫性と安定性を有していることが示されたと言える。

表3 下位領域尺度の信頼性

下位領域	α 係数	信頼性係数
相互独立性		
独断性	.72	.71
個の認識・主張	.74	.71
相互協調性		
評価懸念	.81	.76
他者への親和・順応	.70	.66
相互独立性全体	.79	.69
相互協調性全体	.78	.70
尺度全体	.59	.50

表4 再検査相関と下位領域間相関

	再検査相関	下位領域間相関		
		個の認識 ・主張	評価懸念	他者への 親和・順応
2群と5群				
独断性	.74	.54	-.29	-.38
個の認識・主張	.75		-.30	-.22
評価懸念	.67			.53
他者への親和・順応	.60			
3群と6群				
独断性	.65	.54	-.25	-.30
個の認識・主張	.71		-.37	-.24
評価懸念	.73			.46
他者への親和・順応	.71			
4群と7群				
独断性	.60	.39	-.28	-.12
個の認識・主張	.70		-.11	-.09
評価懸念	.60			.45
他者への親和・順応	.59			

- ・下位領域間相関は2、3、4群のものである。
- ・絶対値.22以上の相関はすべて $p < .01$ で有意。

妥当性と他尺度との関連：改訂尺度の構成概念妥当性を確認するべく実施した集団主義尺度、自己意識尺度、日本的自己意識尺度、および自尊心尺度と各下位領域との相関は、表5に示すとおりである。

集団主義尺度との間には、全体では相互協調性の「評価懸念」「他者への親和・順応」で有意な正相関、相互独立性の「独断性」で有意な負相関が見られる。さらに、集団主義の3下位領域毎に検討すると、全体で見られた上記の相関は、主に「他者への依存性」において顕著であることが分かる。集団主義は、独立した個人と社会・集団の対立という図式を前提とした、本来は相互独立的自己観に立脚する概念ではあるが（北山，1995）、その中でも「他者への依存性」の側面でのみ選択的に相関が見られたことは、本尺度の妥当性を示すものと言えよう。相互独立—相互協調的自己観の概念は、自己と社会の対立という前提には立たず、自己と他者の関係の本質を問題とするものであるからである。

自己意識尺度との関連では、公的自己意識および社会的不安は、相互協調性とは有意な正の相関（ただし社会的不安は「評価懸念」とのみ）、相互独立性とは有意な負相関（ただし公的自己意識は「独断性」とのみ）を示している。このように、社会的対象としての自己を意識する傾向を示す公的自己意識、および、他者がいる場面で精神的に動揺しやすい性質を示す社会的不安の2つの特性と、自己を本来的に他者との関連で捉えるか否かを含意する相互独立—相

表5 他尺度との相関

	独 断 性	個 の 認 識 ・ 主 張	評 価 懸 念	他 者 へ の 親 和 ・ 順 応
集団主義				
伝統的集団主義	-.08	.03	.12	.12
他者への依存性	-.33***	-.12	.23**	.27***
親族の相互依存性	-.11	-.03	.12	.24***
全 体	-.23***	-.06	.21**	.29***
自己意識				
私的自己意識	.14	.21	.28*	-.12
公的自己意識	-.32**	-.14	.63***	.54***
社会的不安	-.28*	-.25*	.43***	.11
日本的自己				
分け隔てのない親和性	-.34***	-.36***	.40***	.42***
他者評価への懸念	-.39***	-.35***	.63***	.40***
他者への信頼感	.07	.11	.04	.10
個人の自立	.35***	.32***	.00	-.10
身近な他者への配慮	.07	.15	.04	.14
他者評価への防御姿勢	-.13	-.15	.32***	.27***
排他的な利己主義	-.00	-.11	.16	.05
自 尊 心	.33**	.51***	-.44***	.11

・*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

互協調性との関連が強いことは、本尺度の妥当性を反映すると言える。他方、私的自己意識は「評価懸念」と弱い負相関を示しているのみである。この傾向は木内（1995）の知見と一致している。

高田・松本（1995）によれば、いわゆる日本的自己は、Markus & Kitayama（1991）の普遍的概念化に対応し相互協調性を含意する「分け隔てのない親和性」「他者評価への懸念」「他者への信頼感」、相互独立性に即した「個人の自立」、日本文化に特殊的な「身近な他者への配慮」「他者評価への防御姿勢」「排他的な利己主義」の7因子から構成される。表5から明らかのように、本尺度は総じて普遍的因子との相関は目立つが、特殊的因子との相関関係は少ない。すなわち、「分け隔てのない親和性」「他者評価への懸念」は、本尺度の相互協調性に関する下位領域とは有意な正相関、相互独立性に関する下位領域とは有意な負相関を示している。また、「個人の自立」と相互独立性領域との間にも有意な正相関がある。これに対し、特殊的因子では「他者評価への防御姿勢」と相互協調性領域との正相関が見られるのみである。これらの結果から、本尺度の構成概念妥当性は一応の保証を得たと言えよう。

さらに、自尊心尺度との関連については、相互独立性に関する下位領域との間では有意な正相関が得られたのに対し、相互協調性領域では「評価懸念」との間に有意な負相関が見られた

のみであった。これは黒川（1994）の知見と一致する部分を含み、相互独立的自己観に依拠した従来の自尊心測定尺度と文化的自己観との関係について、再検討の必要性を示唆している。

下位領域間の関係：本尺度は、相互独立性と相互協調性を別次元に位置するものと捉え、またそれぞれは2つの下位領域から構成されている。その妥当性を検討するため、再検査を行なった対象者について、4つの下位領域間の相関を検討した。その結果が前掲の表4に含まれている。有意な相関が多いが、その中では相互独立性に関する下位領域と相互協調性に関する下位領域との間の相関は相対的に低い。また、「独断性」と「個の認識・主張」、「評価懸念」と「他者への親和・順応」の間の相関はある程度高いが、前述した同一下位領域の再検査相関よりは低い。すなわち、下位領域尺度内の整合性よりも下位領域尺度間の相関が低いという結果が、再検査を行なった3群に共通して示されている。

また、前述した下位領域尺度の内的整合性に関する表3には、相互独立性と相互協調性領域のそれぞれ10項目を一括した場合、および、全20項目を一括した場合の α 係数と信頼性係数も試みに掲げてある。これによれば、含まれる項目数が増加したにも拘らず、相互独立性と相互協調性を一括した場合の内的整合性はさほど上昇せず、全項目を一括した場合には却って低下している。

さらに、4つの下位領域のそれぞれについてそれに含まれる項目の平均値を尺度得点とし、各々の平均値を基準として対象者を領域毎に上位群と下位群に分割した⁷⁾。「独断性」と「個の認識・主張」、および「評価懸念」と「他者への親和・順応」について、それぞれの上位群と下位群の分布の状態を示したのが表6である。これによれば、一方の下位領域で上位群であるが他方で下位群に属する者が全体の3割前後存在することが分かる。これらの結果から、相互独立性と相互協調性、また各下位領域は、ある程度の独立性を持つと言えよう。

表6 上位群と下位群の分布

		相互独立性				相互協調性	
		個の認識・主張				他者への親和・順応	
		上位群	下位群			上位群	下位群
独 断 性	上位群	226 (31.0)	107 (14.7)	評 価 懸 念	上位群	274 (37.6)	138 (19.0)
	下位群	104 (14.3)	291 (40.0)		下位群	116 (15.9)	200 (27.5)

・（ ）内は全被験者中の割合。

表7 平均尺度値

	独 断 性	個の認識 ・ 主張	評価懸念	他者への 親和・順応
男 子 (N=684)	4.51 (0.96)	4.25 (1.11)	4.96 (1.16)	4.90 (0.79)
女 子 (N=253)	4.45 (0.92)	4.19 (0.98)	4.89 (1.10)	5.02 (0.69)
全 体 (N=937)	4.49 (0.95)	4.23 (1.08)	4.94 (1.15)	4.94 (0.77)

- ・ () 内は標準偏差。
- ・ 最大値 = 7、中点 = 4、最小値 = 1。

尺度得点：本研究における全対象者群のうち、被験者数が多く、かつ重複して測定を行っていない1～4群と7群の一部のそれぞれについて、上述した各下位領域の尺度得点の男女別平均値を算出した。群×性×下位領域（繰り返し要因）の3要因分散分析によれば、群の主効果は見られず（ $F(4,927)=1.77$ ）、また、群を含む有意な交互作用も見られなかった。（群×性： $F(4,927)=1.51$ 、群×下位領域： $F(12,2781)=1.59$ ）。したがって、これらの平均尺度値は複数の対象者群を通じた安定性を持ち、青年後期の大学生の基準値と見なし得よう。

そこで、全被験者を一括して扱うこととし、その平均値を表7に示した。性×下位領域（繰り返し要因）の2要因分散分析を行なったところ、下位領域の主効果が見られた（ $F(3,2805)=96.22$ $p < .0001$ ）。各下位領域における全体平均に対するNewman-Keuls検定によれば、相互独立性に属する下位領域と相互協調性に属する下位領域の間には有意な差があり（ $p < .001$ ）、相互独立性より相互協調性のほうが肯定されている。また、相互協調性の「評価懸念」と「他者への親和・順応」の間に有意差はない一方、相互独立性では「独断性」は「個の認識・主張」より有意に肯定されている（ $p < .001$ ）。相互協調性が相互独立性を凌ぐこのような日本人大学生における傾向は、Markus & Kitayama (1991) の分析に合致するものである。

さらに、性の主効果は見られないが、性×下位領域の有意な交互作用があり（ $F(3,2805)=3.04$ $p < .0001$ ）、「他者への親和・順応」の領域においてのみ女子は男子より有意に（ $t(935)=2.11$ $p < .05$ ）それを肯定している。この結果は、女子は男子より一般に相互協調的自己観が優勢であるという木内（1995）の知見とは異なる。

考 察

本研究の結果、相互独立性では「独断性」と「個の認識・主張」、相互協調性では「評価懸念」と「他者への親和・順応」の下位領域から構成される尺度が作成され、それはほぼ満足し得る信頼性と妥当性を持っていることが確認された。さらに、相互独立性と相互協調性、およびそれぞれの中の下位領域は、互いにある程度の独立性を持つことも確認された。しかしながら、今後さらに検討を加えるべき点もいくつか残されている。以下にその若干を考察する。

最初に、今回の研究で見出された下位領域の問題がある。この下位4領域は、松田・黒川

(1994)による相互独立性に関する「独断性」「自己信頼」、相互協調性に関する「他者への順応」「評価懸念」と類似する部分が多い。これらの下位領域の意味内容を考えると、「個の認識・主張」と「他者への親和・順応」はいずれかと言うと自己と他者の関係の本質に関する認識を含意しているのに対し、「独断性」と「評価懸念」は、行動における他者への配慮あるいは関心の程度に係わっていると思われる。藤原・神山(1993)は、従来開発されてきた相互独立的一相互協調的自己観や、集団主義一人主義に関する測定尺度は、単に思考・感情・行動等が他者依存性か否かの「独立性一相互依存性」の次元だけではなく、それが公的・表面的なものか個人の内面に係わるものかの「表面性一内面性」の次元を加えた場合によりよく説明されることを、因子分析的に明らかにしているが、本研究の結果をそれに即して捉えることもできよう。

他方、Markus & Kitayama (1991)による相互独立的一相互協調的自己観の概念は、マクロ・レベルとしての文化と、ミクロ・レベルとしての個人との接点に立つ包括的概念であり、その統体的枠組みをさらに下位領域に細分化することには、疑問の余地がないでもない。しかしながら、例えば1次元的な木内(1995)の尺度では一般的な性差が現われているが、下位領域から構成される本尺度では性差が見られるのは「他者への親和・順応」の領域に限定されることが示されている等、広範な意味に亘る相互独立的一相互協調的自己観を多次元的に吟味することには、一定の意味と有効性はあると考えられる。いずれにせよ、後述する比較文化的問題とも併せて、今後なお検討を加える必要がある。

次に、今回の尺度は大学生のみを対象として作成されている。日本文化における自己の特質を十全に把握するには、その形成あるいは発達過程を検討する必要がある。したがって、青年後期の大学生以外の発達段階における相互独立的一相互協調的自己観の様態を明らかにしなければならない。そのような観点から高田(1994; 1995b)は児童・生徒用尺度を作成し、既に述べたような一定程度の知見を得ている。しかしながら、高田(1992)の原尺度と同じく、その安定性にはなお疑念が残されている。信頼性ある児童・生徒用尺度を作成するとともに、成人期以後の資料を収集することは急務である。

最後に、そして最も重要な点として、比較文化的視点と文化内比較の相同性の問題がある。本研究も含め、本邦における相互独立的一相互協調的自己観に関する尺度構成的研究は、本稿冒頭に述べたような論理に立脚し、そのような相同性を前提として行なわれている。しかしながら、その前提は今後さらに実証的に吟味されるべき問題である。高田・松本(1995)の知見によれば、相互独立的一相互協調的自己観が人間存在の個性的側面と社会的側面に沿ったものであるとしても、日本文化においてはその両側面にMarkus & Kitayama(1991)の概念化を越える部分が含まれている可能性がある。すなわち、相互独立的自己観と相互協調的自己観として捉えられる意味内容が、日本文化と西欧文化において同一であるという保証は、未だ実証的には確認されていない。

逆に、高田(1992)の尺度の英訳版をアメリカ(Okazaki, S.私信, 1992/9/14)あるいはカナダ(Heine, S.私信, 1994/5/16)の大学生に実施した場合、本研究でしばしば確認されたような多因子構造にはならず、相互独立性と相互協調性の2因子が主に抽出されると言う。日本人の場合、他者に配慮を払うことなく自分の判断に基づいて行動することは、他者とは異なる自分自身を認識する「個の認識・主張」とは別次元の「独断性」と受けとられるのに、北アメリカ文化ではその両者は自然に一体化したものとして認識されているのかも知れない。また、北アメリカ文化では相互協調的自己観として促えられる他者と自己の関係認知の中でも、他者への配慮や意識は日本文化では常に「評価懸念」として認識されるほど、特別なものであ

るかも知れないのである。

現在のところ、本邦における相互独立的—相互協調的自己観の尺度作成に関する研究は、文化内比較研究に偏っている嫌いがある。今後はさらに比較文化的視点に立った研究を進めることにより、日本文化における社会的行動の特性を理解する上での文化的自己観の概念の有効性を検討する必要があるだろう。

引用文献

- 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
- Fenigstein, A., Scheier, M.F., & Buss, A.H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- 藤原武弘・神山貴弥 1993 独立・相互依存主義諸尺度の因子論的研究 日本社会心理学会第34回大会発表論文集, 190-191.
- 浜口恵俊 1977 「日本らしさ」の再発見 日本経済新聞社
- 星野 命 1970 感情の心理と教育(二) 児童心理, 8, 161-193.
- 上瀬由美子・堀野 緑 1995 自己認識欲求喚起と自己情報収集行動の心理的背景 —青年期を対象として— 教育心理学研究, 43, 23-31.
- 北山 忍 1995 文化的自己観と心理のプロセス 社会心理学研究, 10, 153-167.
- 北山 忍・高木活人・松本寿弥 印刷中 日本の自己の文化心理学 I. 成功と失敗の帰因 心理学評論.
- 木内亜紀 1995 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 66, 100-106.
- 梶田毅一 1988 自己意識の心理学 第2版 東京大学出版会
- 黒川正流 1994 相互依存性の性質と自己解釈図式が対人影響行動に及ぼす効果の検討 平成4・5年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 黒川正流・坂田桐子 1993 埋没図形テストによる自己解釈図式測定尺度の吟味 日本グループ・ダイナミックス学会第41回大会発表論文集, 186-187.
- 黒川正流・坂田桐子 1994 自己図式の独立—相互依存性が現実自己像の定位に及ぼす影響 日本グループ・ダイナミックス学会第42回大会発表論文集, 230-231.
- Markus, H.R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition, motivation, and emotion. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Markus, H.R., & Kitayama, S. 1994 The cultural construction of self and emotion: Implications for social behavior. In S. Kitayama & H.R. Markus (Eds.) *Emotion and Culture*. Washington D.C.: American Psychological Association. Pp.89-130.
- Markus, H.R., & Warf, E. 1987 The dynamic self concept: A social psychological perspective. *Annual Review of Psychology*, 38, 299-337.
- 松田大治・黒川正流 1994 状況依存的自己解釈図式尺度作成の試み 日本グループ・ダイナミックス学会第42回大会発表論文集, 138-139.
- Meijer, Z.Y. 1995 *When the self-serving bias does not serve the self: Attributions of success and failure in cultural perspective*. Doctoral dissertaton. Free University, Amsterdam.
- 押見輝男 1992 自分を見つめる自分 サイエンス社
- Rosenberg, M. 1965 *Society and adolescent self image*. Princeton: Princeton University Press.
- Semin, G.R., Goossens, A., & Taris, T. 1995 *An index for measuring individualism versus*

- collectivism*. Vrije Universiteit, Kurt Lewin Institute. (Meijer, 1995より引用)
- 高田利武 1992 独立的・相互依存的自己と自尊感情および社会的比較 日本グループ・ダイナミックス学会第40回大会発表論文集, 109-110.
- 高田利武 1993 青年の自己概念形成と社会的比較 —日本人大学生にみられる特徴— 教育心理学研究, 41, 339-348.
- 高田利武 1994 独立的・相互依存的自己理解の発達の变化と環境要因 日本グループ・ダイナミックス学会第42回大会発表論文集, 142-143.
- 高田利武 1995a 自己認識方途としての社会的比較の位置 —日本人大学生にみられる特徴— 奈良大学紀要, 23, 259-270.
- 高田利武 1995b 相互独立—相互協調的自己観と自己認識方途 日本グループ・ダイナミックス学会第43回大会発表論文集, 134-135.
- 高田利武・松本芳之 1995 日本の自己の構造 —下位様態と世代差— 心理学研究, 66, 173-178.
- 田中国夫 1979 書評「水原泰介他編『講座社会心理学』1-3 東京大学出版会」 年報社会心理学, 20, 219-222.
- Triandis, H.C. 1989 The self and social behavior in differing culture contexts. *Psychological Review*, 96, 506-520.

注

- 1) 従来、独立的自己理解および相互依存的自己理解の訳語が一般的に用いられている。しかし、この概念の提唱者自身によって、相互独立的自己観および相互協調的自己観の訳語が使用されるに至ったため（北山, 1995）、本稿ではそれに従った。また、記述の統一を図るため、尺度の名称についても原著者による呼称に係わらず、相互独立的自己観・相互協調的自己観尺度の語を用いた。
- 2) 原尺度40項目のうち、いずれの因子にも高い負荷を示さなかったため、高田（1993）に記載されていない1項目は「色々な人や状況に合わせて自分の行動を変えることに困難を感じる」である。
- 3) 項目分析により除去した10項目は、相互独立性では「自分はユニークだと思う」「色々な人や状況に合わせて自分の行動を変えることに困難を感じる」「自分の所属集団のために自分の利益を犠牲にすることはほとんどない」「所属集団の仲間の望むように振る舞うことが大切とは思わない」「他人に頼るのは好きではない」、相互協調性では「集団であれば、ふだん一人ではできないことも平気でやる」「知人との付き合いはよくするが、自分と全く関係のない人に対しては気を遣うことなく、気ままな振る舞いをする」「自分の住んでいる所では人目をばばかり自重しているが、見知らぬ土地に行くと気ままな振る舞いをする」「家族の一人におきた問題や事件は個人だけの問題ではなく、家族全体に関わる問題であると感じる」「決断をするときは、自分自身にどのように影響するかを考える前に他の人にどう影響を及ぼすかをまず考える」である。
- 4) 相互独立性と相互協調性は異なった次元に位置し、それぞれは互いに独立した下位領域から構成される、という本研究における前提に基づき、各因子の直交性を仮定しバリマックス回転を用いた。ただし、主軸法等の他の抽出法や斜交回転も念のため検討したが、基本的に同一の結果を得た。また、各サンプル毎に項目分析の結果残った項目（対象者1群：40項目、2群：38項目、3群：38項目、4群：37項目）を対象に固有値1以上を基準に因子を抽出した場合、対象者1・2群では8因子解を得たが、対象者3・4群ではそれぞれ9因子および10因子解となり、高田（1992）の如き8因子解は再現性に乏しいことが確認された。
- 5) 除外された7項目は「一旦決めたら、それが誤りであると自分自身が思うまでは、絶対に自分の判断

を変えない」「自分の性格を容易に言うことができる」「自分は自立していると思う」「他の人からの期待によって自分の行動や考えを左右されないほうだ」「人を喜ばせるためや人によく思われるために、自分の意見や自分のやり方を変えることはない」「自分が良いと思っても他の人が良いと考えないならば、自分の考えを変えることがある」「他の人の期待に自然と自分を合わせてしまう」である。

- 6) 自己観尺度は、7群以外は高田（1992）の原尺度、7群は研究Ⅰの項目分析の結果に基づく10項目を除外した30項目から成る尺度を使用した。また、7群以外は他尺度を自己観尺度と同時に実施し、7群では自己観尺度実施の3ヶ月後に実施した。
- 7) 全調査対象者728名の平均値は、独断性（4.54）、個の認識・主張（4.29）、評価懸念（4.93）、他者への親和・順応（4.92）である。

Abstract

The revised scale for measuring individual differences on the independent and interdependent construal of the self (Markus & Kitayama, 1991) was developed. Based on a formerly constructed scale (Takata, 1992), which was administered to nine hundred and thirty-eight undergraduate subjects divided into four groups, twenty items were selected. These items were divided into the four subcategories using the item analysis and factor analyses, namely 'dogmatism' and 'individuality' for the independent construal, and 'evaluation apprehension' and 'dependency on others' for the interdependent construal. Fairly high reliability and construct validity of the scale was confirmed through the additional six hundred and thirty-seven subjects.

付録

次の(1)~(20)について、あなた自身にどの程度あてはまるかをお答え下さい。例えば、「いつも相手の立場にたって物事を考える。」に「ややあてはまる」のであれば、(例)のように7つの選択肢のうち該当するところに○印をつけてください。

(例) いつも相手の立場に立って物事を考える。

		○				
ぴったりあてはまる	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない	全くあてはまらない

(1)常に自分自身の意見を持つようにしている。

--	--	--	--	--	--	--

(2)人が自分をどう思っているかを気にする。

--	--	--	--	--	--	--

(3)一番最良の決断は、自分自身で考えたものであると思う。

--	--	--	--	--	--	--

(4)何か行動をするとき、結果を予測して不安になり、なかなか実行に移せないことがある。

--	--	--	--	--	--	--

(5)自分でいいと思うのならば、他の人が自分の考えを何と思おうと気にしない。

--	--	--	--	--	--	--

(6)相手は自分のことをどう評価しているかということから、他人の視線が気になる。

--	--	--	--	--	--	--

(7)自分の周りの人が異なった考えを持っていても、自分の信じるところを守り通す。

--	--	--	--	--	--	--

(8)他人と接するとき、自分と相手との間の地位や相対関係が気になる。

--	--	--	--	--	--	--

(9)たいていは自分一人で物事の決断をする。

--	--	--	--	--	--	--

(10)仲間の中での和を維持することは大切だと思う。

--	--	--	--	--	--	--

(11)良いか悪いかは、自分自身がそれをどう考えるかで決まると思う。

--	--	--	--	--	--	--

(12)人から好かれることは自分にとって大切である。

--	--	--	--	--	--	--

(13)自分が何をしたいのか常に分かっている。

--	--	--	--	--	--	--

全くあてはまらない
 あてはまらない
 あまりあてはまらない
 どちらともいえない
 ややあてはまる
 あてはまる
 ぴったりあてはまる

(14)自分がどう感じるかは、自分が一緒にいる人や、自分の
 いる状況によって決まる。

(15)自分の考えや行動が他人と違っていても気にならない。

(16)自分の所属集団の仲間と意見が対立することを避ける。

(17)自分の意見をいつもはっきり言う。

(18)人と意見が対立したとき、相手の意見を受け入れること
 が多い。

(19)いつも自信をもって発言し、行動している。

(20)相手やその場の状況によって、自分の態度や行動を変え
 ることがある。

